PC プレス
2019 / Sept.
vol.020

Index

#001	世界遺産 知床と絶景の大自然を巡る 北海道 道東	p.1
#002	［お天気雑記帳］幕末の災害・疫病	p.10
#003	PCのニューフェースたち	p.11
#004	PC ニュース～北から南から～	p.42

「新緑の美しい時期、道東に遊びに行きませんか」。久しぶりに友人から一通のメールが届いた。

道東エリアは、北海道の東部に位置する網走・十勝・釧路・根室を指す。面積は四国4県に山口県と島根県を加えた6県分の広さを誇る。オホーツク海や太平洋に面し、摩周湖や阿寒湖などのカルデラ湖、原生林や湿地をはじめ、日本離れしたスケール溢れる大自然が一番の魅力だ。なかでも2005年7月に世界自然遺産に登録された知床は、世界でも類をみない生態系を持ち、手つかずの自然が残る秘境地。

▲知床
2005年7月、日本で3番目に世界自然遺産に登録。手つかずの自然が残り、希少な野生動物が生息する知床は、海から陸への生態系がわかりやすくみられることや環境保全活動が評価された。

表紙のイラスト／
ウトロ漁港の人工地盤

「北海道　道東　世界遺産 知床と絶景の大自然を巡る」で訪れた、「ウトロ鮭テラス」。プレキャストPC工法で作られ、1階は漁業専用エリア、2階は駐車場等となっています。

広報誌の名称について

「PCプレス」は、

コンクリート（C）にプレストレス（P）の力が作用した様子を表現したもので、
「プレス」は定期刊行物を意味しております。

流氷が運ぶ栄養分はプランクトンを養い、その恩恵をアザラシ、オオワシなどの鳥類が受け、ふるさとの川に遡上した鮭は、そこで山の生き物の餌となる。この海から陸へとつながる生態系、さらに絶滅危惧種のシマフクロウをはじめ、希少な動植物が生息している点が高く評価されている。プレート運動や火山活動、浸食などによって形成された険しく雄大な景観と野生動物とのふれ合いを楽しむことができる。

道東の春の訪れは遅く、本州が桜の満開の時期にも雪が残り、桜の見ごろを迎えるのは5月中旬以降。その一方で紅葉の時期は早く、お盆を過ぎたころから葉が色づき始め、9月中旬には道東の多くが朱色に染まる。そのため、新緑シーズンは6・7月と短く、この時期を狙って観光に訪れるリピーター客が多いそう。青々とした緑と花がきらめき、間近に迫ってくるような新緑は、美しさを超えた感動があるという。

自然はもちろん、新鮮な魚介、酪農や農業の盛んなエリアなら海の幸と山の幸の両方を楽しめるに違いない。美味しい乳製品やスイーツも……と旅心をくすぐる。日常から離れて、道東の旅に出かけたい。そんな気持ちが日に日に強まっていった。

世界遺産 知床と絶景の大自然を巡る

北海道 道東

北海道のスケールを目の当たり 一直線に延びる「天に続く道」

羽田空港から道東観光の空の玄関口である女満別空港まで1時間45分。定刻通りに飛行機は到着し、到着すると同時に聞こえてきたのは、「現在の気温は30℃です」という機内アナウンス。道東の6月の平均気温は15℃以下と聞いていたので、季節外れの暑さに驚いた。

青空から太陽の光が燦々と降り注ぐなか、レンタカーを借りて道東旅行をスタート。目の前には真っすぐな道路と、青々とした葉をつけるジャガイモと小麦の畑が広がり、爽やかな風が木々を揺らす。広大な北海道らしい美しい景色に、心と体が解き放たれていった。

北海道は直線道路が多い。これは原生林を切り開いて道路を造る際、目的地を最短距離で結んで工期短縮を図り、建設コストを抑えるためだったという説がある。ちなみに「日本一直線が長い国道」と言われているのは、札幌市と旭川市を結ぶ国道12号の美唄市光珠内～滝川市新町区間で、その距離は29・2㎞。一方、景観日本一と話題を集めているのが、知床半島の北の付け根に位置する全長27㎞の直線道路。まるで天にのぼるように見えることから「天に続く道」と呼ばれている。この話題のスポットを目指して、オホーツク海に沿って走る国道334・244号線を東に向かった。

「この道？ いや違う」「ここかな？」。すぐに見つかると思っていたが、道路のほとんどが直線で迷ってしまう。右往左往しながら斜里川を渡ろうとしたとき、橋のたもとに建つ立派な銅像を見つけた。オジロワシは、オホーツク海を象徴する天然記念物で、ここ斜里町の町鳥。秋から冬にかけて大空を雄大に飛ぶ姿を目にできるそうだ。

直線道路を進んだ先に観光バスや乗用車、観光客で賑わう一角を発見。「ここだ！」と確信して車から降り、後を振り返ってみると、それまで見ていた景色が一変し、空にのぼっていくように果てしなく続く道が目の前に広がっていた。スタート地点から一直線に下っていく楽しみ方があるが、感動と出会うなら、このルートを選ぶのもいいと思った。

一度も鉄道が走ることなく 廃止になった越川橋梁

知床観光の中心地であるウトロに向かう前に、歴史遺産として貴重な越川橋梁を見るために、国道244号から根北峠へと車を走らせる。

◀天に続く道
国道334・244号線を含む全長約27kmの直線道路。ウトロから斜里へ向かう道の先が、天にのぼるように見えることから名づけられた。スタート地点には看板と撮影用の展望台がある。

木々が生い茂る山道に突然、現れた巨大なコンクリートのアーチ橋が越川橋梁。これは元国鉄根北線の工事跡なのだそう。

大正後期、釧路まで硫黄を運ぶ釧網本線や海産物を運ぶための標津線、さらに釧網本線から分岐して斜里から標津までの根北線が計画されたが、根北峠の工事は難航。戦時中、軍事上必須な路線であるとして過酷な労働を強いて、峠の手前の越川橋梁まで完成させた。1957年に斜里―越川間が開通するものの、越川橋梁までは路線が延びず、1970年に廃止になった。その後、国道244号の拡幅工事のため、橋脚2本が撤去されて以来、現在の姿のまま残されている。

近づいてみると、鉄道が走るはずだった上部には草木が生い茂り、ゴツゴツとしたコンクリートの断面がよく見えた。物資が不足する戦時下、ダムのような大型建造物と同様に大きな石が使われたようだ。物流機能は果たせなかったが、これからも多くの人たちに歴史を伝える役割を担っていくであろう。

ダイナミックな滝や巨岩など国道沿いで知床八景を堪能

再び、ウトロに向かっていくと大きな滝が見えた。国道334号沿いには、オロンコ岩や夕陽台、フレペの滝などの知床八景が点在するが、このオシンコシンの滝もそのひとつに数えられている。

知床最大と言われるオシンコシンの滝は、一枚岩の上を滑り落ちるように水が轟音を立てて流れる。まるで巨大滑り台のようだ。新緑の季節は、山々からの雪解け水により水量が多く、間近で見ると迫力満点。降り注ぐ水しぶきが気持ちよく、高台からは知床連山やオホーツク海を望むことができた。

トンネルを抜けるとすぐにゴロンとした大きな岩が姿を現した。オロンコ岩をはじめ、三角岩やゴジラ岩などの巨岩がそびえる一帯には、先住民族であるオロッコ族が住み、アイヌ民族と戦った伝説が残る。

階段を利用して、高さ60mのオロンコ岩に登ることに。170段の急な石段を高齢者の方も元気に登っていたが、思った以上に体力が必要で汗がにじみ出る。ようやく頂上に着くと潮風がそよぐなか、海鳥が群れを成して飛び交っていた。今はカモメの棲家になっているようだ。岩礁が透けて見えるほど青く澄んだオホーツク海やウトロ漁港、その周辺の町並みを見渡す。ふと、漁港の屋上にそびえる複数の大型クレーンに目がいった。

▲ 斜里橋
斜里川の一番下流に架かる橋で、目の前にはオホーツク海が広がる。斜里町の鳥であるオジロワシが今にも羽ばたきそうな銅像が印象的だ。単純T桁橋、橋長128.1m、支間31.9m、幅員16.5m。

▼ 越川橋梁
1939年に着工完成した10連コンクリートアーチ橋。全長147 m、最大地上高21.6 mの橋梁は国の登録有形文化財。

▼ オシンコシンの滝
幅約30m、落差約80mの知床最大規模の滝。水の流れが二手に分かれていることから「双美の滝」と呼ばれる。日本の滝100選に選定。

▼ オロンコ岩
ウトロ港にある高さ60mの巨岩。「そこに座っている岩」を意味するアイヌ語が名前の由来になっている。

自然災害から地域を守り漁業を支援する人工地盤

ウトロ海域は、定置網漁業が主体で漁獲量の8割を占める。特にサケが多く、市町村別では斜里町が15年連続で日本一の漁獲量（2018年現在）を記録し、その多くがウトロ漁港で水揚げされている。

『ウトロ鮭テラス』の愛称で親しまれる人工地盤の漁港施設は、2016年に完成。漁業従事者の作業環境や衛生環境の向上を目的に、耐久性に優れたプレストレストコンクリート（PC）の人工地盤が採用され、知床では羅臼（らうす）漁港にも採用されている。1階は競りなどが行われ、2階には駐車場があり、サケの水揚作業を真上から見学できる。

ウトロ海域には定置網が15ヵ所あり、秋の最盛期には1日の水揚げが500トンを超えることもあるそうだ。長さ2㎞の定置網に身網（魚が溜まる部分）が3つ付くが、そのひとつはオロンコ岩ほどの大きさのため、3ヵ月かけて網の補修や調整を行う。

一方、知床半島の東側に位置する羅臼漁港の屋上には、駐車場と見学スペースのほか、長方形の天窓を複数設置。大量の自然採光により日中の照明代を節約し、省エネを実現している。北方領土の国後島を見渡せる漁港では、数々のイベント開催し、住民の安全を守るだけでなく、地域活性化にも貢献している。

▲ ウトロ漁港の人工地盤
珍しい2階建ての漁港は、安全面や衛生面からPCの人工地盤が採用された。面積は1万7000㎡、大きさは縦176m、横204m、高さ10m。

▶ 長さ2kmの定置網は、人工地盤上でクレーンで釣り上げて補修を行う

▲ 羅臼漁港の人工地盤
北方領土の国後島を一望できる漁港は、観光スポットとしても人気が高く、ネイチャークルーズや観光船を運行する。2007年竣工。建築面積1万5750㎡。

オホーツク海に静かに沈む幻想的で美しい夕日に息をのむ

太陽が西の空に傾き、徐々に日が暮れていくなか、急いで斜里町の夕陽台へと向かった。ここは、展望地からウトロ港と三角岩、オロンコ岩を眼下に見渡せる夕日の名所で、すでに多くの人たちがシャッターチャンスを待ち構えていた。空には厚い雲がかかっていたが、ギリギリのタイミングで夕日を見ることができた。オレンジ色の夕日が空と海を染め、ゆっくりと地平線へ沈んでいく景色は、息をのむほど美しく幻想的。この日の、この瞬間しか見ることのできない美しい景色に出会えたことに感動を覚えながら、宿にチェックインした。

▲ 夕陽台
斜里町の国設知床野営場の海側に位置する夕日のビュースポット。知床八景のひとつで、オホーツク海とウトロ港を一望できる絶景が人気を集めている。

一度は見たい最果ての絶景 野付半島のトドワラへ

オホーツク海側にあるウトロから東側の根室海峡へと向かうため、唯一、知床半島を横断できる知床横断道路（国道334号）を利用する。標高738mの知床峠を通る道は、11月上旬～4月下旬まで通行止めのため、「日本一開通期間の短い国道」と言われている。そのほかにもユニークな道路が近くにあるという。

メロディーロードは、道路の路面につくられた溝と、その溝の上を走行するタイヤとの接触や摩擦などにより発生する音でメロディーを生じさせるもの。時速60㎞の法定速度で走ると「しれとこのみさきに～♪」と『知床旅情』が聞こえ、思わず笑みが溢れた。

今回の道東の旅で、ぜひ行ってみたいと思ったのが野付半島だ。根室半島と知床半島の中間、根室海峡に突き出た半島は、全長約28㎞にわたる日本最大の砂嘴（さし）。湿地と海が広がる周辺には、250種以上の野鳥が確認され、四季折々の原生花が咲き誇る花の名所としても有名だ。

フラワーロードと呼ばれる道道950号は、野付半島の付け根から延びる約15㎞のメイン道路。最も狭い場所ではまるで海の上を走っているような気分になる。半島の中間地点にある白骨化した枯れ木群「ナラワラ」を通り、さらに先にある「トドワラ」を目指して車を進め、野付半島ネイチャーセンターに到着した。

ここからトドワラまでの片道1・3㎞の道のりは、トラクターバスを利用した。ガタゴトと揺られながらピンク色のハマナス、黄色のエゾカンゾウ、白色のエゾノシシウドなどの花々が咲く道を進み、バスはトドワラ広場で停まった。トドワラの「トド」はトドマツから由来。野付半島は、江戸時代中期までトドマツやエゾマツからなる原生林が広がっていたが、年々海水に浸食され立ち枯れの森となったそうだ。

人がやっと行き来できるほどの細い桟橋を歩きながら先端を目指す。聞こえてくるのは、穏やかな波音のみで、ときおりカッコウの鳴き声が響きわたる。辺りを照らす太陽が雲に隠れると潮風が冷たく感じ、物悲しい雰囲気が漂う。荒涼とした独特の景色は、まさに「最果ての絶景」だった。

4年前の台風の被害で多くが倒木。今でも地盤沈下と風化が進み、いつまでこの景色が見られるかはわからないと聞き、感慨深い心境になった。

▼メロディーロード
標津町の土木建設会社が開発した北海道発祥のユニークな道路。2004年10月に実験ロードとして、日本で初めて標津町川北北7線（町道）に施工された。

▲野付半島
2004年に北海道遺産に選定、翌年には湿地の保全に関するラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）に登録された。

▲トドワラ
海水の浸水により、トドマツが立ち枯れたまま残る。同じような理由でミズナラが枯れたナラワラもある。

日本音楽著作権協会（出）許諾第1909121-901号

▲ **北海シマエビ**
希少で高価な北海シマエビは、縦縞模様が特徴。茹でるときれいな朱色になり、「海のルビー」と言われている。

漁期の産地ならではの味覚 北海シマエビの踊り食い

ネイチャーセンターの食堂には、海鮮丼やいくら丼、鮭親子丼など新鮮魚介の美味しそうなメニューが豊富にあった。その中で目にとまったのは「北海シマエビ」。浅い海域に藻が密生する野付湾は、北海シマエビの産卵場。初夏と秋に旬を迎えるが、踊り食いは流通が発達した今でも漁期の期間のみ、地元でないと食べられないという。ピチピチと跳ねる北海シマエビに「命をいただきます」と感謝してから素早く殻を外してパクリ。ぷりぷりの身は、噛むほどに味わい深く、エビ本来の甘みが感じられる。贅沢に丼もいただき、野付半島を大満喫した。

丸い地球を実感できる 地平線を望む大パノラマ

野付半島から内陸に向かう道には、広大な牧草地が広がる。根室と釧路の間に位置する根釧（こんせん）台地は酪農が盛んで、中標津町の北19号道路は、牛乳を出荷するタンクローリーが走るため「ミルクロード」と呼ばれている。この道の先には、道東随一のビュースポットがある。

標高270mの台地に位置する開陽台。西側にある開陽台牧場は、東京ドーム約100個分の広さを有する草地に千頭ほどの乳用牛を放牧。広大な牧場の一画には遊歩道があり、放牧されている牛を間近で見られる。

円柱型の施設の屋上は展望台だ。360度を見渡す大パノラマの地平線を見ていると地球が丸いことを実感できる。ここからは、知床連山や野付半島、国後島をはじめ、北海道らしい雄大な景色を望むが、特に有名なのが根釧台地の格子状防風林だ。2000年、スペースシャトルエンデバーに搭乗した宇宙飛行士・毛利衛さんが撮影したビデオには、この地域に広がる格子状防風林がはっきりと映し出され、「宇宙から見える防風林は根釧台地にしかない」と語られた。開拓時代の殖民区画を示す歴史的意義も持つ格子状防風林は、北海道遺産に登録されている。

▲ **開陽台**
町営開陽台牧場の高台にある展望台からは、大パノラマで根釧台地を見渡すことができる。ソフトクリームなどを販売するカフェも併設。

▲ **格子状防風林**
根釧台地に広がる格子状防風林は、幅 180m のカラマツ林が巨大な格子状をつくり、碁盤の目のように連なる。4町にまたがるその面積は、約1万5000ha、最長直線距離は約27㎞という地球規模のスケール。

深い霧に包まれた摩周湖 マリモとアイヌの里・阿寒湖へ

道東といえば、千島火山帯の活動によってできた阿寒・屈斜路・摩周の3つのカルデラ湖が有名だ。亜寒帯性の針葉樹林に覆われた森と湖が織りなす美しい景色はもちろん、阿寒湖温泉をはじめとする温泉地が多いことから、全国屈指の人気観光地として注目を浴びている。今回の旅では、世界有数の透明度を誇る摩周湖を観光し、国の特別天然記念物であるマリモが生息する阿寒湖の温泉地に宿泊することにした。

開陽台から国道243号を経由して摩周湖へ向かう途中、どんどん雲行きが怪しくなり、霧に覆われていった。摩周湖の第一展望台に到着したときには、霧が濃くて何も見えないほど。展望台から摩周湖を見下ろすと、すべては霧の中。摩周湖周辺は年間100日以上も霧に包まれるそう。景色を見ることはできなかったが、「本当に霧の摩周湖でした」という笑える土産話ができた。

気を取り直して、摩周湖から国道241号を経由して阿寒湖へ。徐々に空は明るくなり、1時間ほど車を走らせて到着したころには、霧は晴れて阿寒湖の美しい景色に出迎えられた。

▲ **エゾジカなどの野生動物**
親子のエゾジカに遭遇。3日間の道東の旅では、キタキツネや野鳥などの野生動物と出会うことができた。

▼ **阿寒湖アイヌコタン**
木彫りの作品を販売する店や飲食店が建ち並ぶ。国の重要無形文化財であるアイヌ古式舞踏や人形劇なども上演している。

阿寒湖は、釧路市にある北海道で5番目に大きな湖。この地に豊かな森や湖沼群を誕生させたのが、アイヌ語で男の山を意味する「ピンネシリ（雄阿寒岳）」と女の山を意味する「マチネシリ（雌阿寒岳）」と言われる活火山だ。ふたつの山の伝説は、古の時代からアイヌ民族の間で受け継がれてきた。

北海道の各地には、アイヌ民族の集落が点在する。なかでも阿寒湖温泉街にある阿寒湖アイヌコタンは、120人ほどのアイヌの人々が暮らす道内最大級の集落（コタン）。今でも歴史や文化が深く根付き、所々で触れることができた。

ホテルでチェックインを済ませ、阿寒湖のほとりにある遊歩道を散策した。温泉街の中心地から森の中の道に入っていくとエゾシカに遭遇。人に慣れているせいか、驚くことなく親子でゆったりと草を食べている。さらに先に進んでいくと、江戸時代に北海道開拓の礎を築いた探検家であり、北海道の名付け親である松浦武四郎の詩碑があった。1858年3月に阿寒湖畔を訪れた武四郎は、著書の『久摺（くすり）日誌』に阿寒の豊かな自然や魅力について記している。今年7月には北海道150周年記念ドラマがテレビ放送され、多くの話題を呼んだ。

ホテルに戻り、湖を一望できるレストランでズワイガニやお寿司、ジンギスカンをいただいた。降り注ぐような満天の星空が印象的だった。

▲ **阿寒湖**
阿寒国立公園にある阿寒湖。水面の標高は420mで最大深度は45m、周囲は30kmの淡水・カルデラ湖。

▶十勝大橋
3径間連続PC斜張橋。橋長501m、最大支間長251m。32.8mという広幅員でありながら独立１本柱の主塔を採用するなど、当時の最新技術が導入された。

「東洋一の名橋」と称され歴史と産業に貢献した十勝大橋

最終日の今日は、帯広空港から東京に帰るため、道東自動車道・本別インターから芽室インターに降りて帯広市内に入った。

帯広市をはじめとする周辺市町村一帯は、十勝と呼ばれるエリア。十勝平野を中心とする肥沃な大地では大規模酪農や畑作が盛んで、乳製品やスイーツの産地としても有名だ。十勝の人口は約35万人だが、約４００万人の食を提供する日本の食糧基地としての役割を担う。

このような産業を支えているのが十勝川だ。全長１５６㎞、流域面積は全国６位の広さを誇る川には、地域のランドマークとしての存在感を放ち、地域の産業や物流の発展に貢献する橋梁が点在する。帯広市と広尾町を結ぶ高規格幹線道路「帯広広尾自動車道」に架かる芽室町の士狩大橋。帯広市の帯広北バイパスには、道内最大の支間１７０ｍ（完成当時）を誇る巨大ＰＣ橋・平原大橋はそのひとつ。

特に注目したいのは、帯広市と音更（おとふけ）町の中心街を結ぶ十勝大橋だ。

最大支間長２５１ｍと国内最大規模のＰＣ斜張橋は、青空にスッとそびえ立つ姿に貫禄が感じられる。ちなみにこの十勝大橋は２代目。１９４１年に完成した初代コンクリート橋の十勝大橋は、鉄筋コンクリート橋として完成当時国内最大の支間を有し、橋面積は世界第２位という大規模な橋で、「東洋一」と賞賛された。それから55年後に役割を終えたが、歴史的遺産としての価値が高い橋は、主桁の一部を保存し、完成時から２００年にわたり耐久性等の試験調査に利用されることになった。

▲現在も一部が保存されている、初代コンクリート橋の十勝大橋の主桁。

▼西３条通架道橋
ＪＲ帯広駅の脇にある鉄道橋は2径間連続PC斜版橋。日高山脈などの北海道らしい自然が描かれている。橋長125m。最大支間長64.3m。1998年完成。

甘辛タレと炭火の香りがクセになる帯広名物の豚丼

十勝大橋から帯広駅までは車で数分。ここには三角形状の斜版が印象的な鉄道橋がある。ＰＣ橋をしっかり確認した後、十勝帯広の名物・豚丼をいただく。豚と帯広の縁は古く、開拓時代には「牛は牛乳、馬は馬力、豚は食料」とされていた。帯広駅構内の飲食店で注文すると、ご飯の上に惜しげもなく厚切りロース肉が盛られたボリューム満点の豚丼が出てきた。肉は柔らかく、炭火の香ばしさと甘辛い秘伝のタレの味わいがたまらない。見た目よりもあっさりとしていて、あっという間に完食した。

新緑の道東は、短い時期だからこそ、緑や花の生命力と強さを感じることができた。しかし、この豊かな自然は永遠のものではない。海と川、森が繋がる生態系を保全していくには大変な努力が必要だ。アイヌ民族は、自然界のものをカムイ（神）として崇め、共存共栄を図ってきた。その精神を今も受け継ぎ、各地で積極的に環境保全活動に取り組んでいる。都会にいる私たちも地球の環境問題について他人事にするのではなく、自発的にきちんと向き合い、小さなことから行動に移していきたいと強く感じた。

▲十勝帯広名物の豚丼
昭和初期、ウナギのかば焼きをイメージして完成させた豚丼。ロースの厚切り肉をしっかりと焼き、甘辛い醤油ダレで味付けしたものが主流。

越川橋梁跡
斜里橋
ウトロ漁港の人工地盤
羅臼漁港の人工地盤
オロンコ岩
夕陽台
オシンコシンの滝
天に続く道
開陽台
メロディーロード
阿寒湖
トドワラ
士狩大橋
貴老路大橋
十勝大橋
西３条通架道橋
平原大橋
サロマ湖
網走
斜里
女満別空港
根北線
美幌
北見
石北本線
屈斜路湖
釧網本線
摩周湖
知床半島
国後島
標津
野付半島
根室
足寄
釧路
厚岸
根室本線
帯広
帯広空港
241
243
244
272
334
335
世界遺産
知床と絶景の
大自然を巡る
北海道道東
旅MAP